



核廃棄物処理は ネバーエンディングストーリー

*** コンラード最終処分場***

ドイツは2022年に脱原発を決めており、廃炉作業や核廃棄物の処分に焦点が移っている。

高レベル放射性廃棄物の最終処理場はないが、低・中レベル用にはコンラード鉱山跡があり、2022年の稼働をめざして建設中である。核廃棄物は鉄鉱石を取り出した穴ではなく、地下700から1000メートルのところに新たに長さ数百メートルの空間を造って収めることになっている。

処分場は鉄鉱石の層に位置するが、上下を粘土層に挟まれているため、長期保管に耐えられるという。地下1000メートルまで潜るエレベータは定員20人でひとつしかなく、320人が4交替で工事しているが、作業は途方もなく大変だ。

鉱山跡は広く、車で移動して2時間ほど見学した。説明が終わり地上に戻ろうと思ったら、エレベータが動いていない。ちょうどシフト交代時間あたり、行列はどんどん長くなっている。「いつ復旧するかわからない」と言われたが、作業員たちは立ちっぱなしで談笑しながら待っている。「こういう時のために、地下に食料が用意してある」というが、明日になるのかもといわれてますます不安になる。そのうち復旧した。結局待っていたのは1時間ほどだったが、当てもなく地下で待ち続けることの恐怖を実感した。



工事が進むコンラード最終処分場

完成したら全国原発から、ここに核廃棄物が持ち込まれる。列車やトラックで毎日のように運び込まれる大量の核廃棄物に、地元住民は事故や環境汚染を心配する。穴は最後にコンクリートで固められ、廃棄物は二度と取り出せないようにする計画だが、そこまでしなければならない核のごみとはいったい何なんだろう。

核廃棄物は地殻変動などに備えて取り出せるようにすべきという声もあれば、テロなどの悪用防止のため取り出せないようにすべきだという意見もある。政府職員のひとりが「核廃棄物の処理はネバーエンディングストーリー。時間ばかりかかって、だれも責任を取ろうとしない。本当に安全に処理できるのか誰にもわからない」と話したのが印象に残った。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

ドイツで子育て



明は日本では小学2年生、ドイツでは3年生になります。11月13日のパリのテロ事件は学校でも話題にもなったらしく、テロについて子ども同士で話したといいます。さらに17日、ハノーファーでのオランダとドイツのサッカー親善試合がテロの対象となっていると中止に。人口50万人の中堅都市で、まったくテロとは無縁と思っていただけに驚きました。ドイツは多くの難民を受け入れ、イスラム国についても報道されていますが、それがサッカー中止に結びつく現実。こういう世界で今の子どもたちは生きているのだと思いました。